

平成 26 年
9 月 30 日

病害虫発生予報 10月号

茨城県病害虫防除所
茨城県植物防疫協会

農作物の収穫後は被害残渣や被害葉を持ち出すなど
圃場管理に努め、次作の病害虫の発生を抑えましょう。

< 目 次 >

I. 今月の予報

【注意すべき病害虫】

イチゴ：ハダニ類	1
共通害虫：オオタバコガ	1
共通害虫：ハスモンヨトウ	2

【その他の病害虫】	3
大豆, ナシ, イチゴ, トマト, 秋冬ハクサイ, レタス, 秋冬ネギ	

【防除所レポート】

平成 26 年におけるブドウ主要病害の発生経過と今後の防除対策について	4
平成 26 年における水稲主要病害虫の発生経過と防除対策について	5

II. 今月の気象予報

最新の農薬登録内容は、(独)農林水産消費安全技術センターホームページの「農薬登録情報提供システム」(http://www.acis.famic.go.jp/index_kensaku.htm)で確認することができます。

詳しくは、病害虫防除所へお問い合わせ下さい。

茨城県病害虫防除所 Tel : 029-227-2445

予報内容は、ホームページでも詳しくご覧いただけます。

ホームページアドレス <http://www.pref.ibaraki.jp/nourin/byobo/>

フェロモントラップデータ随時更新中

I. 今月の予報

【注意すべき病害虫】

イチゴ

1. ハダニ類

[予報内容]

発生時期	発生量	発生地域
平年並	平年並～やや多い	県下全域

[予報の根拠]

- ① 9月下旬現在、被害葉率(本年値 1.0%、平年値 2.5%)は平年並、発生地点率(本年値 43%、平年値 16%)は平年よりやや高い。

[防除上注意すべき事項]

- ① ハダニ類は増殖が速いので、発生が少ないうちに防除を徹底する。特にビニール被覆後は発生が増加するので注意する。
- ② 薬剤は、薬液が葉裏や葉柄にもよくかかるよう十分な量で丁寧に散布する。また、薬剤抵抗性の発達を抑えるため、気門封鎖剤を除き同一系統・同一薬剤の連用を避ける。
- ③ ミツバチや天敵を導入する圃場では、薬剤の影響日数等に十分注意する。

共通害虫

1. オオタバコガ

[予報内容]

発生時期	発生量	発生地域
—	やや多い	県下全域

[予報の根拠]

- ① 9月下旬現在、フェロモントラップへの誘殺数は、水戸市、筑西市、坂東市で平年より多く、土浦市、龍ヶ崎市、古河市で平年よりやや多い。
- ② 9月下旬現在、大豆におけるオオタバコガの寄生虫数(本年値 0.2頭、過去4年平均値 0.3頭(25株調査))、発生地点率(本年値 23%、過去4年平均値 21%)ともに平年並である。

[防除上注意すべき事項]

- ① 施設栽培では、ハウスの開口部に防虫ネットを設置し、成虫の侵入防止に努める。
- ② 老齢幼虫になると薬剤が効きにくくなるため、圃場をよく観察し、若齢幼虫のうちに防除を徹底する。
- ③ 薬剤散布は、薬液が葉裏や株元にもよくかかるよう丁寧に散布する。また、薬剤抵抗性の発達を抑えるために、系統の異なる薬剤を散布する。
- ④ レタスやハクサイ等では、結球内に幼虫が食入するとその後の防除が困難になるため、結球始期の防除を徹底する。
- ⑤ トマト、ピーマン等では収穫終期まで加害が続くので、発生しているハウスでは防除を徹底する。

(平成 26 年 9 月 1 日発表 病害虫発生予察注意報第 3 号参照)

2. ハスモンヨトウ

[予報内容]

発生時期	発 生 量	発生地域
—	平年並	県下全域

[予報の根拠]

- ① 9月下旬現在、フェロモントラップへの誘殺数は東海村，銚田市，土浦市，龍ケ崎市でやや多く，常陸大宮市，笠間市，筑西市で平年並，水戸市，八千代町で平年よりやや少ない。
- ② 9月下旬現在，ハスモンヨトウの発生量は，サツマイモでは平年並～やや多く，秋冬ハクサイ及びレタス，イチゴでは平年並，大豆では平年並～やや少ない。

[防除上注意すべき事項]

- ① 施設栽培では，ハウスの開口部に防虫ネットを設置し，成虫の侵入防止に努める。
- ② 幼虫の齢期が進むにしたがって薬剤の殺虫効果は低くなるため，圃場をよく観察し，若齢幼虫の集団の早期発見に努め，若齢幼虫のうちに防除を徹底する。
- ③ 薬剤散布は，薬液が葉裏や株元にもよくかかるよう丁寧に散布する。また，薬剤抵抗性の発達を抑えるために，系統の異なる薬剤を散布する。
- ④ レタスやハクサイ等では，結球内に幼虫が侵入するとその後の防除が困難になるため，結球始期の防除を徹底する。

【その他の病害虫】

作物	病害虫名	発生予測	発生概況及び注意すべき事項
大豆	カメムシ類	発生量：やや少ない～少ない	9月下旬現在，平年よりやや少ない～少ない発生である。
ナシ	黒星病	発生量：－	9月下旬現在，平年より多い発生である。秋季防除を徹底する。落葉は翌年の伝染源となるので，適切に処理する。
イチゴ	炭疽病	発生量：平年並	9月下旬現在，平年並の発生である。
トマト	黄化葉巻病	発生量：－	9月上旬現在，平年より多い発生である。発病株はただちに抜き取り適切に処分する。促成トマトでは，ハウスの開口部に0.4mm目合いの防虫ネットを設置する等，媒介虫であるタバココナジラミの防除を徹底する。
秋冬ハクサイ	白斑病	発生量：やや多い	9月下旬現在，平年よりやや多い発生である。
	軟腐病	発生量：平年並～やや多い	9月下旬現在，平年並～やや多い発生である。台風等の強風を伴う降雨の後は，防除を徹底する。
	べと病	発生量：平年並～やや多い	9月下旬現在，平年並の発生である。向こう1か月の降水量は平年並か多く，発生を助長する条件である。
レタス	菌核病	発生量：平年並～やや多い	9月下旬現在，平年並の発生である。向こう1か月の降水量は平年並か多く，発生を助長する条件である。結球開始期以降は発生しやすいので，防除を徹底する。
	斑点細菌病	発生量：やや多い	9月下旬現在，平年並～やや多い発生である。向こう1か月の降水量は平年並か多く，発生を助長する条件である。結球開始期に降雨が続くと発生しやすいので，防除を徹底する。
	腐敗病	発生量：平年並～やや多い	9月下旬現在，平年並の発生である。向こう1か月の降水量は平年並か多く，発生を助長する条件である。結球開始期に降雨が続くと発生しやすいので，防除を徹底する。
秋冬ネギ	ネギアザミウマ	発生量：やや多い	9月下旬現在，平年よりやや多い発生である。

平成 26 年におけるブドウ主要病害の発生経過と今後の防除対策について

本年は、ブドウの主要病害(べと病, 褐斑病, 晩腐病, さび病)が平年より多い発生となりました。発生経過および今後の防除対策についてまとめましたので、参考にしてください。

1. べと病

主に葉, 花穂(果穂)に発病し, 白色のカビを生じる。葉では発病が激しいと黄変して落葉し, 幼果では発病すると表面に白色のカビができたのち, 鉛色に変わり脱粒しやすくなる。例年, 葉での発病は6月頃から発生が見られ, その後9月にかけて発生が増加する。

本年は7月から葉での発生を確認した。また, 露地栽培では8~9月, 雨よけ栽培では9月に急増し, 平年より多い発生となった(図1)。なお, 露地栽培では早期落葉した園地も確認された。

【防除対策】

Z ボルドー等により秋季防除を徹底する。また, 落葉は翌年の伝染源となるため, 集めて適切に処分する。

2. 褐斑病

葉に黒褐色の病斑を生じ, 発病が激しいと黄変し落葉する。例年7月頃から発生が見られ, 9月にかけて発生が増加する。

本年は7月から発生を確認し, 平年より多い発生となった(図2)。

【防除対策】

Z ボルドー等により秋季防除を徹底する。病原菌は, 落葉や幹の粗皮間隙, 結果母枝等で越冬し, 翌年の伝染源となる。そのため, 落葉は集めて適切に処分する。また, 結果母枝等の剪除や, 冬期に粗皮剥ぎを行い, 適切に処分する。

3. 晩腐病

主に果実が発病する。被害果は表面に鮭肉色の孢子粘塊を生じ, 果実に多数のしわが寄り乾燥固化する等, 商品価値が低下する。例年, 8月頃から発生が見られ, 9月にかけて発生が増加する。

本年は8月から発生を確認し, 平年より多い発生となった。また, 雨よけ栽培でも発生を確認した。

【防除対策】

罹病した果梗の切り残し, 結果母枝, 巻きひげ等は, 病原菌の越冬場所となるので剪除し, 適切に処分する。また, 発芽前の休眠期にデランフロアブル等による防除を徹底する。例年, 晩腐病が多発する園では, 雨よけ栽培の導入も検討する。

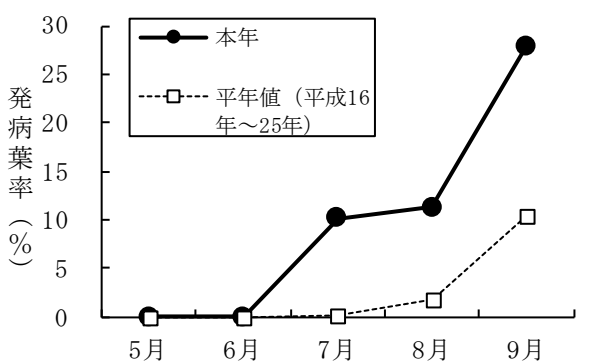


図1 県内のブドウべと病の発生推移

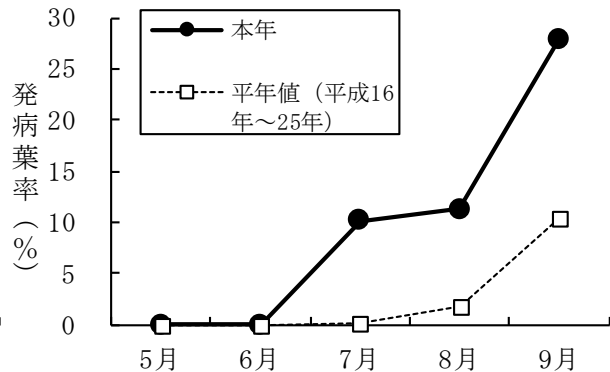


図2 県内のブドウ褐斑病の発生推移

※記載されている薬剤は, 平成26年9月24日現在のものです。

平成 26 年における水稻主要病害虫の発生経過と防除対策について

水稻における主な病害虫の発生生態，本年の発生経過及び防除対策について，県内の定点 57 圃場等の調査結果をもとにまとめました。来年の防除対策の参考にしてください。

1. いもち病

[発生生態]

低温，日照不足，多湿等の気象条件で発生する病害である。葉いもちは例年梅雨入り後の 6 月下旬から発生し始め，梅雨明け直後頃に最も発生が多くなる。その後，出穂期頃に降雨が続くと，穂いもちが多発生する。

[本年の発生経過]

6 月～7 月は，葉いもちの感染好適条件の出現日（BLASTAM*による）が県内の広範囲な地点で認められ，総出現日数も平年より多く，7 月上旬から県内全域で葉いもちが平年並～やや多く発生した。また，出穂期頃の 7 月下旬～8 月上旬に降雨があり，8 月下旬は穂いもちの発生地点率及び発病穂率が過去 11 年中で最も高い値となった。更に，9 月上旬には，穂いもちの発生が急増した。これは，8 月下旬～9 月上旬の気温が平年より低く，日照時間が平年より少なく推移したためと考えられる。

※BLASTAM（ブラスタム）：気象条件から感染に必要な葉面の濡れ時間を推定し，その日が葉いもちの感染に好適か否かを判定するプログラム。

[主な防除対策]

- ① 窒素過多は本病の発生を助長するため，適正施肥に努める。
- ② 置き苗は本病の発生源となるため，速やかに本田から持ち出して埋める等処分する。
- ③ 種子消毒は必ず行い，育苗箱施薬とあわせ，圃場での葉いもちの発生状況と気象条件に応じて薬剤防除を行う。

2. 縞葉枯病

[発生生態]

ヒメトビウンカが媒介するウイルス病である。イネは，ウイルスを保毒したヒメトビウンカに吸汁されると本病に感染する。ヒメトビウンカの幼虫はイネ科雑草で越冬し，4 月上旬頃になると成虫になって麦畑に移動して増殖し，6 月上旬頃に水田に飛来し増殖する。

[本年の発生経過]

発生量，発生面積ともに昨年より大きく増加した。8 月上旬，鹿行地域を除く県内全域で本病の発生を確認し，発生地点率及び発病株率は過去 11 年中で最も高い値となった。特に県西地域，県南地域での発生が目立った。

[主な防除対策]

- ① 収穫後は耕起してヒコバエをすき込むとともに，ヒメトビウンカの越冬場所となる畦畔のイネ科雑草の除草を徹底する。
- ② ヒメトビウンカの防除対策として，育苗箱施薬や本田防除を実施する。
- ③ 縞葉枯病抵抗性品種の導入も検討する。

(平成 26 年 9 月 25 日発表 病害虫速報 No. 6 参照)

3. 斑点米カメムシ類

[発生生態]

イネの出穂前は水田周辺の畦畔やイネ科雑草地に生息し、イネの出穂とともに水田に侵入し、穂を加害しながら葉や穂に産卵する。ふ化した幼虫も同様に穂を加害し、加害は収穫期まで続く。

[本年の発生経過]

7月下旬の雑草地における斑点米カメムシ類の発生が平年より多かったため、7月29日に注意報を発表した。一方、7月上旬の本田における発生地点率は高かったものの、7月～8月の本田における発生量は平年並であった（図1）。

本田における発生種の主体は例年同様クモヘリカメムシで、8月下旬においては、約8割を占めた（図2）。イネカメムシは、県南地域で発生が多かったため平年に比べその割合が高くなった。

[主な防除対策]

水田周辺のイネ科雑草の除草を徹底する。また、穂揃期（成虫対象）や出穂期の10～15日後（幼虫対象）に薬剤防除を行う。

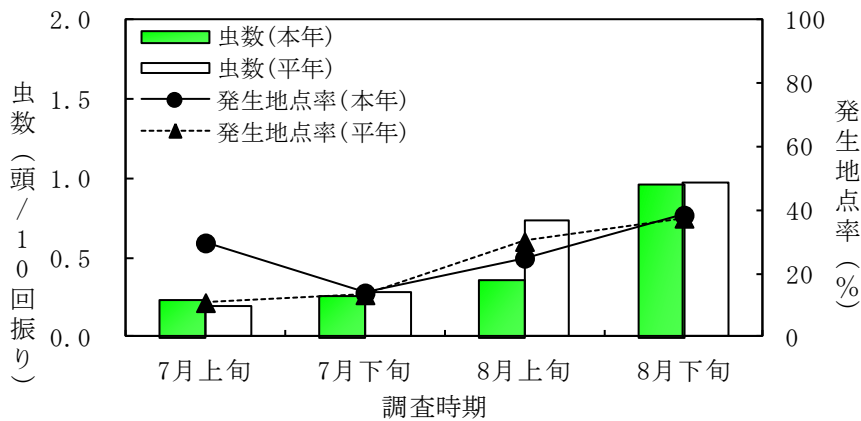


図1 県内における斑点米カメムシ類の本田の発生の推移

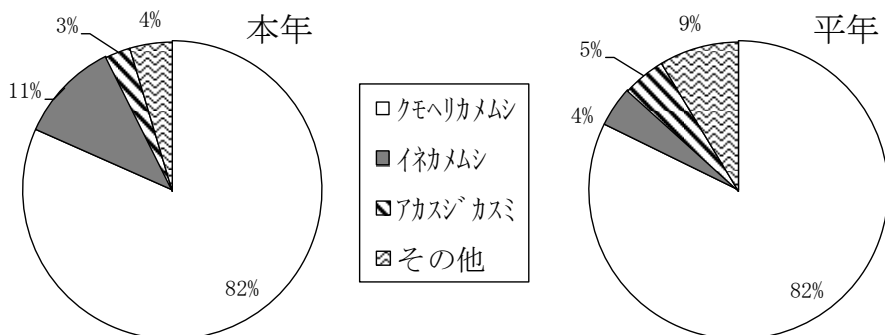


図2 県内の本田における8月下旬の斑点米カメムシ類の種別割合

II. 今月の気象予報

関東甲信地方 1 か月予報

(予報期間 9月27日から10月26日)

気象庁 (9月25日 発表)

<向こう1か月の気温、降水量、日照時間の各階級の確率 (%) >

[確率]

要素	予報対象地域	低い(少ない)	平年並	高い(多い)
気温	関東甲信全域	30	40	30
降水量	関東甲信全域	20	40	40
日照時間	関東甲信全域	40	40	20

[概要]

天気は数日の周期で変わりますが、平年に比べ曇りや雨の日が多いでしょう。

<1週目の予報> 9月27日(土曜日)から10月3日(金曜日)

気温 関東甲信地方 平年並または高い確率40%

<2週目の予報> 10月4日(土曜日)から10月10日(金曜日)

気温 関東甲信地方 平年並または低い確率40%

<3週目から4週目の予報> 10月11日(土曜日)から10月24日(金曜日)

気温 関東甲信地方 平年並の確率40%

農薬を使用する際は

- 1 使用する農薬のラベルを必ず確認し、適用作物、使用方法、注意事項等を守りましょう。
- 2 散布時には、周辺作物に飛散(ドリフト)しないよう注意しましょう。
- 3 農薬の使用状況を正確に記録しましょう。
- 4 使用後は散布器具やホース内等に薬液を残さず、良く洗浄しましょう。